ユニバーサル絵本ライブラリーUniLeaf

代　表
大下　利栄子

神奈川県

目の不自由な子どもは、白い紙に点字が打たれた“絵のない絵本”を読むことが殆どで、その種類も少ないが、イギリスには誰でも楽しめるユニバーサルデザインの絵本が普及している。日本では制作や普及させる担い手がいないと知った大下利栄子さんは「ユニバーサル絵本ライブラリーUniLeaf（ユニリーフ）」を2008年に設立。既存の絵本に透明の点字シートを挟んだユニバーサルデザインの絵本“UniLeaf Book”（ユニリーフブック）を作り始めた。

ユニリーフブックは１冊１冊手づくりで、古本屋をまわり状態のいい既存の絵本を手に入れ、紙がささくれ立たないように１ページずつ丁寧に解体。そして、大型の業務用透明シートを絵本のサイズにカットし、点字用タイプライターで点字を打つ。解体した絵本と点字シートを再製本（リング製本）して完成。近年、印字は機械化されたが、点字作成には細かいルールがあり、パソコンで編集した文章をそのまま点訳ソフトで変換するだけでは間違いが出てしまうこともあって、今でも試行錯誤している。点字用の透明なシートは、硬さや厚みなど種類によって違いがあり、子どもの指で触って一番いい感触のシートにするなど、使う側への配慮は欠かさない。

ユニリーフブックは本年５月に1,000冊に到達。無料で月に１度、５冊ずつ27家庭・４学校等に定期的に貸出しているほか、不定期にも現在10家庭、４学校、視覚特別支援学校に貸出している。

市販の絵本を解体し、ページの大きさに切った透明プラスチックシートに本文を点字で打ち込み、見開き毎に挟み込んだ、日本唯一のユニバーサルデザイン絵本UniLeaf Booksを製作、視覚障害児のいる全国の家庭、学校に定期貸し出ししています。

20余年前、娘が失明し、初めて知らされた社会の抵抗感や特別視に打ちのめされました。見える子と見えない子を分離せず、幼い頃から一緒にいるのが当たり前だったら、そんな「慣れ」が「特別の」を「普通の子」にするのでは…。そのために時と場を共有するツールが一つでも増えたらいい…。そんな願いを込めて、見える子と見えない子が一緒に楽しめる、英国発、透明点字シート付きユニバーサルデザイン絵本を一人で作り始めました。英国から送られた１冊の本だけを頼りに、日本の資源で試行錯誤し11年後、手作り絵本は1,000冊を超え、利用者も協力者も全国に広がりました。真っ白の点字本を読む小さな我が子が自分の知らない遠い世界にいる…。そんな親御さんの悲しみを少しでも癒すことができたら嬉しいです。

この絵本は、子どもたちが一緒に楽しむためのみならず、共に生きる社会のシンボルとして、多くの方、特に若者に知っていただきたいと活動も続けています。県立逗子高校の授業や部活動での製作は10年となり、卒業後も続けてくれている子が現れました。近年は市民講座を開催、点字の仕組みを解説し、製作作業を体験しながら、皆で１冊作り全国に貸し出しています。イベント出展では絵本紹介の傍ら、点字に親し

んでもらう企画が好評です。ヘレン・ケラーのいた米国マサチューセッツ州パーキンス盲学校の工房で作られる、数十年来変わらぬ希少点字タイプライターで名前を打ち、しおりを作ったり、娘の協力を得て、目と同じ速さで、手で、日本語と英語で、絵本を読むのを見てもらったり…。人類の偉大な発明である「点字」を体感します。絵本もイベントも、それは当たり前のことと誰もが思うなら活動はもはや不要です。そんな日を夢見て、その日まで続けていきたいと思います。

この度は、数少ない目の不自由な子どもたちのための、身の丈の小さな活動にお目を留めてくださり大変光栄に存じます。受賞を機に、ますます多くの方に絵本を知っていただけましたら二重の喜びです。身に余る栄誉を本当に有難うございました。

代表　大下　利栄子

▲ユニリーフブック

▲横浜山手西洋館絵本フェスティバル出展・ワークショップ

▲県立逗子高校総合学習点字絵本製作

▲書庫兼作業場

▲定例作業会

▲ユニバーサル絵本製作講座

札幌後見支援の会

会　長
半藤　政一

北海道

2002年に札幌家庭裁判所の調停委員や元職員らが中心となって設立した。認知症や精神疾患等で後見人が必要にもかかわらず親族になり手がなく、資力もないため専門職後見人候補者のいない人に対し、会員自らが後見人となるほか、候補者の育成や資質向上に取り組んでいる。

2000年の成年後見法施行により後見人制度が開始されたが、本人のお金を管理し、本人に代わって病院や施設を探して入院・入所手続を行い、時に葬儀も行うなど、活動の幅は広い。弁護士等の専門職が後見人となる場合は、財産の管理行為が中心となりがちであるが、会員の後見人は、病院や施設を見舞って話し相手になるなど、市民後見人の先駆的存在としてボランティア精神にのっとり、身上監護にも熱心に取り組んでいる。

現在116人が会員登録し、これまでに170件程の後見事件に関与してきた。また研修会等を実施し、後見人候補者育成や後見人のサポート業務などに積極的に取り組んでいるが、活動資金は会員の会費と寄付で賄っている。

（推薦者：札幌後見支援の会）

この度は札幌後見支援の会を社会貢献団体として表彰していただき、誠にありがとうございます。当会はこれまで対外的に活動報告などをしていませんでしたので、このような賞を受賞したのも初めてであり、会員一同大変光栄に思っております。

成年後見制度は2000年から開始されましたが、当会はその２年後の2002年に、後見人の候補者が見付からない事件の後見人になることを目的に設立しました。成年後見制度は、認知症の高齢者や障害者など判断能力の不十分な方に後見人を付けることによって、その方の財産や生活を守ろうとする制度ですが、後見人となるべき身近な親族のいない場合や、財産がなくて後見人に報酬が支払えない事件については、後見人のなり手がなく、裁判所が後見人を選任するのに苦労する事例が見られるようになりました。札幌後見支援の会は、このような事例であってもボランティア精神で無報酬でも後見人を引き受けることを目的に設立したものであり、現在までに約170件の後見人を引き受けております。

札幌後見支援の会は会員の年会費と寄付で運営しており、報酬が支払えない場合は当会から交通費等を支給して後見人を支援しています。また当会の後見人は、財産の管理だけではなく、できるだけ本人に寄り添った手厚い身上の保護をすることを心がけており、本人に会う機会を増やして話し相手にもなるなど、本人の希望に添った保護を目指しております。

現在、後見制度は利用促進のための制度改革の真っ最中にあり、当会も他の後見人団体と協力したり、市の協議会に参加して意見を述べたりするなど、対外的な活動も行い後見制度の改革に積極的に協力するようになりました。このような矢先に今回の受賞者に選ばれたことは誠に喜ばしいことであり、当会の先輩方がこれまで後見人と

して苦労しながら実績を積んできたことが実を結んだものと思っております。

設立時には33名だった会員も、現在は約120名まで増えました。実際に後見人になってみるとその責任は重く、緊急や困難な判断を要する場合も生じます。そのような場合はこれまでの後見人活動で得た貴重なノウハウが必要であり、日頃からの研修による経験の継承が欠かせません。今回の受賞を機に、研修の一層の充実と自己研鑽を重ねながら、気持ちを新たに日々の活動を続けていきたいと思っております。

札幌後見支援の会
会長　半藤　政一

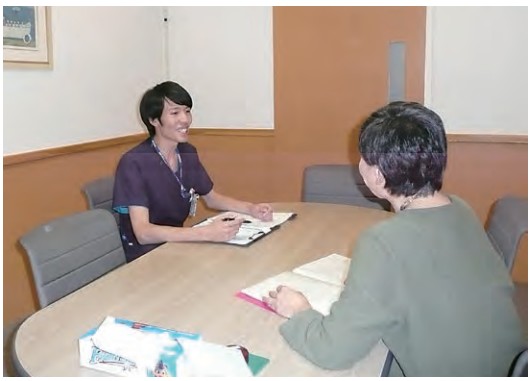
▲役員会を毎月開催しています

▲施設に入居している被後見人を訪問した時の様子

▲入院している被後見人を訪問しています

▲入居施設のケアマネージャーからケアプランの説明を受けています

▲被後見人の自宅を訪問


▲病院のソーシャルワーカーと打ち合わせしています

認定 NPO 法人四つ葉のクローバー

理事長
杉山　真智子

滋賀県

18歳で児童養護施設や里親ファミリーホームを巣立った子どもたち、親からの虐待が再発した子どもや、帰る家がなく経済的にも困窮してホームレスになった15歳以上の子どもたちなどを、一時的に居住支援（シェアハウス）で預かり、就労支援を行って社会に貢献できる人材として世に送り出す自立支援を行っている。

「四つ葉のクローバー」では、いつでも必ず信頼できる大人がいて相談ができ、「失敗してもいいんだよ」という環境を作っている。また、こうした場所はこのホームだけではなく地域で支えていく「応援団」が必要だと考え、カフェや餃子屋の併設・経営やイベント開催など、子どもたちと地域社会をつなぐ玄関の役割を担っている。巣立った子どもたちとは100％繋がりを保っており、月に１度の食事会兼ミーティングの実施や年に数回、講師を招いて働き方の勉強会を行うなど、子どもたちが折に触れて帰ってこられる機会を作っている。

また、「未来基金」を作り、子どもたちの未来を応援するために資格取得や進学などの費用の支援もしている。このほか地域の中小企業家同友会150社が滋賀県内児童養護施設の子どもたちの就労体験の場を提供しており、理解ある地域の応援団に温かく見守られている。

（推薦者：島田豊実）

この度の受賞に際しましては盛大な祝賀会を開催していただき、会長よりご丁寧な祝詞ならびにお祝いをいただき、厚くお礼を申し上げます。この栄誉は幼少期に保護者から受けた虐待や貧困等の生き辛さを抱えながらも前を向き、懸命に生きる若者たちに新たな希望をくださいました。ここにあらためて感謝申し上げる次第でございます。今後も皆様のご期待にそむかぬよう、なお一層の努力を重ねる所存でございますので、なにとぞ応援のほどお願い申し上げます。

初上京、初新幹線の若者を始め、職員、東京の仲間たち約20名が表彰状授与を見守ってくれました。テレビのニュースで見たことがある帝国ホテル＆孔雀の間。あまりのゴージャスさに圧倒され、有名なお寿司、天ぷらのお店、豪華ブッフェ、美味しそうなデザートに目をみはり、目を輝かして長蛇の列に並んでいました。

成人式以来という正装姿の和やかな若者たちを眺めて、やさぐれていた若者たちのことを思い出していました。四つ葉のクローバーは、親からの虐待や帰る家もなく経済的にも困窮してホームレスになったなど、15歳から22歳の若者が共に生活し、社会に貢献する人材として世に送り出す自立援助ホームです。入所時「大人は誰も信用できない」と断言する彼らと信頼関係を構築するまで、職員の闘いのような毎日が続くと言っても過言ではありません。当ホームを卒業後、毎月１度の里帰りシステムを作り、「ただいま～」と顔を見せてくれています。

そんな若者たちが帰宅後、次々と私にメールを送ってきてくれました。その中で23歳の若者のメールを紹介し、この度の社会貢献支援財団への私からのお礼の言葉とさ

せていただきます。

「僕は、四つ葉に住んでいたころ、杉山さんに何度も叱られてぶつかったこともあったけれどそれがすべて愛情やったと、今日改めてわかりました。ホームを退所してからも四つ葉に何度も助けてもらって、言葉じゃ言い表せないほど感謝しています。でも四つ葉や杉山さんに貰ったものを欠片も還すことができていないことが悔しいです。今日、お聞きした表彰された方々の努力や苦悩、覚悟を自分の物差しで測ると、感極まり涙腺が決壊しました。これからは僕自身も誰かのロールモデルになれるよう、社会に対して僕にしか出来ないことを見つけていきます。いつか必ず強さと優しさを持った人間になります。今日、式典で僕は決心しました。社会福祉の力になります。四つ葉のスタッフや仲間に出会えて良かったです。まだまだ弱くて泣き虫で、高い壁や深い穴に邪魔されることもあるかもしれませんが、これからも見守ってください」

理事長　杉山　真智子

▲2019ドリームライブにて若者トークセッション

▲2019夏　琵琶湖で泳ぐ若者たち

▲2019年５月　総会の様子

▲2019年８月　琵琶湖で BBQ

▲社会的養護出身者が子どもを連れて月に一度里帰り

▲毎月一度卒業生も入居者も一緒にご飯と話し合いをする真夜中会議の様子

特定非営利活動法人蜘蛛の糸

秋田県

日本一自殺死亡率の高い秋田県で、さきがけとして2002年から自殺防止に取り組む活動を、行政・大学・民間団体と連携して行っている。創設者は自身が経営者の苦悩を経験し、同じような状況で死を選んだ友人も多くいた事から、中小企業経営者の自殺を食い止めたいと活動を始めた。

一般的にいのちの電話は傾聴を中心に行うが、蜘蛛の糸は問題を一緒に解決していこうと、相談者に積極的に関わり寄添うのが特徴で、電話相談だけでなく、宗教家・臨床心理士・弁護士等有資格者による面談を行い、多重な問題を抱え自死を考える人に対して、一つ一つの問題を共に解決する手法を取る。定期的に「いのちの総合相談会」の開催を告知し年間250人程が相談に来る。抱えている問題の全てを聞取り、どのように解決するかを考え、クリアしていくことで、相談者は生きていく希望を見つけることが出来る。

また、聞取り内容の統計を県に提出し情報共有を行う等、自殺死亡率全国一の汚名返上の為、民間主導で秋田モデルといわれる先駆的団体。

（推薦者：日本ベラルーシ友好協会）

「感謝の言葉」

この度、公益財団法人社会貢献支援財団の「社会貢献者表彰」という映えある賞を受賞できましたことは身に余る光栄であります。令和元年11月25日の授賞式典に参加し、大きな刺激と感動を得ました。前日の会食の場では受賞者の皆様の情熱に圧倒され、当日の式典では受賞者の活動内容に胸を打たれたのです。私は受賞者を代表して挨拶を述べなければなりませんでした。メンバーの多彩な顔触れや活動を紹介するスクリーンの動画を見ているうちに感動に揺さぶられました。「日本には素晴らしい人たちがいる」という余熱が残ったままに登壇しました。挨拶は、しっかりリハーサルしたつもりでしたが、登壇までの数分の間に「日本は素晴らしい」そして「Japan is a beautiful country」という言葉が自然に脳裏を走り抜けたのです。

秋田で生まれ、秋田で育ち、「美の国秋田」をこよなく愛している者です。美しい山河、どこにでも噴き出す温泉、美酒、真面目で温厚な県民性、そして美人の国秋田であります。山登りが趣味で、酒好きにとって、これ以上の自然環境と社会風土の良い地方はありません。その我が愛する秋田県で「自殺率全国一」が長年続いている現状に耐えられませんでした。2001年５月の連休に友人の経営者が、秋田と岩手の県境にかかる高架橋から投身自殺をしました。その報に触れた時に、湧きあがったのは激しい怒りの感情でした。戦後、経済を復興させ、地域経済を支え続け、雇用や納税や商店街の賑わいに貢献してきたのは中小企業経営者たちです。中小企業経営者を「倒産如きで自殺させてはいけない」という激情のままに2002年６月に特定非営利活動法人「蜘蛛の糸」を設立して相談活動を開始しました。当時は自殺対策基本法がありま

せん。地域で活動していると「医者でもない貴方に自殺を食い止められるはずがない」、「自殺は個人の責任だから干渉するな」とか言われましたが、一人で黙々と相談を続けておりました。

2005年５月、自殺対策基本法の制定に向けて参議院議員会館での法律の制定陳情、10万人署名活動に参加し、日本に自殺対策基本法が制定されたのは2006年６月であります。日本は自殺者数「３万人時代」が７年間を経て、ようやく「国民のいのちを自殺から守る」対策がスタートしたのです。自殺対策基本法の成果は大きく、施行後の10年間で全国自殺者数は「３万人台」から「２万人台」へと約３割減少しました。秋田県の自殺者数も2003年の519人をピークに2018年は199人と約６割減少しております。自殺対策に向き合う姿勢はすべて現場にあります。現場に立ち、現場の臭いや風を感じ、現場の悲しみに向き合う。そして、「個」の相談経験を「点」につなげ、歳月をかけて「点」を「面」に広げて「ネットワーク」をつくり上げていきます。これまで県内の民間団体の創設、自殺予防県民運動を立ち上げてきました。幸いにも秋田県の自殺率は減少し、平成最後の年（2018年）にワーストを抜け出し、全国４位に改善されました。自殺対策は人間総合対策です。一個人や一つの団体では自殺を食い止めることは難しいというのが18年間の活動の帰結です。世界に先駆した日本の自殺対策、そして日本の対策を先導する「秋田モデル」は前例のない「生きる支援」のパイオニアになるでしょう。不撓の精神を固持して「愚直であれ」、「愚直であれ」と自己の内面に働きかけて「県民のいのち」を守る活動を続けます。この度の社会貢献者表彰の授賞式で多くの仲間に接し、日本の素晴らしさと人材の豊富さに胸を打たれながら「美の国秋田」で、さらに、生きる支援活動を続けることを決意しております。

理事長　佐藤　久男

▲ふきのとう県民運動会長に就任

▲相談風景

▲東日本大震災相談

▲蜘蛛の糸15周年記念シンポジウム

遠藤　芳輝

福島県

福島県福島市内の自宅付近の県道、市道、側道の草刈り清掃活動を37年にわたり続けている。遠藤さんは農業をしながら国鉄（現JR）職員として働き、仕事の合間を利用して草刈りの範囲を広げていった。草刈りを始めた理由は「誰も刈らないから」と至ってシンプル。だが、その作業量は膨大で、危険も伴う。

今年81歳を迎えた遠藤さんは、自作した靴のすべり止めを装着し、県道５号線脇の急斜面に生えてしまった草は刈り、木はのこぎりも使って切り、さらに細かく裁断して処分する。３キロにも及ぶ範囲をたった一人で作業するが、大型車も通ることが多く交通事故防止のために妻のカツエさんが片付けを兼ねて協力する。

県道５号線の「フルーツライン」と呼ばれる区間は、東日本女子駅伝のコースとなっており、ランナーや沿道で応援する人たちのためにも作業を欠かさない。また小学校や中学校の通学路も見通しが悪くなって危険が起きないよう、子どもたちのために定期的に作業を続けている。

（推薦者：金田　秀雄）

この度は、社会貢献支援財団から令和元年という年に、受賞式に出席させていただきまして誠にありがとうございました。心から厚く御礼申し上げます。

私はもちろんですが、家族も帝国ホテルでの表彰式の演出のきらびやかさと、受賞された方々の素晴らしい活躍にただただ、驚きと賞賛の思いで胸が一杯でした。私がしてきたことくらいでこの式典にいてよいのかなと思いました。私の妻も安倍会長から「おめでとうございます」と声をかけていただき、感激のあまり大粒の涙を流していました。

私事ではありますが、９月頃から体調を崩し検査の結果、胃がんでした。担当医からは、「表彰式は、諦めた方がいい」と告げられ、そのことはとてもショックでした。私も表彰式の出席は無理だと、推薦者の方にその旨を伝えましたが、財団の方々が体調を気遣って下さって、「体の負担にならないように過ごしてください」と温かい言葉をかけて下さいました。家族と推薦者の励ましに支えられ表彰式に出席することが、私の生きる希望でした。当日は、本当に身に余るご配慮を頂き心から感謝致します。受賞者の揺るぎない信念を持った方々と交流させていただいたことは、私の残りの人生にどう生きるかをしみじみと考える機会を与えてくださいました。

福島の原発事故後、県道は大型工事車両の通行量が増し、妻も私と一緒に作業することが多くなり、妻には協力してくれたことを心から感謝しています。作業時は打撲と傷が絶えませんでした。高所の伐採作業は、危険度が高く足元を安定に保つために創意工夫をした金具を装着しました。また山里のため野生動物が民家まで下りてきます。特に狸は多いです。熊が民家近くまで下りてくることもあります。それを物語るように注意喚起のため、ミニパトカーの放送車が通ることもあります。学生たちは熊

に注意するよう学校の指導により、全員カバンに熊よけの鈴をつけて通学しています。

推薦者には、「37年間、なにより学生の交通事故が発生していないのは、とてもすばらしいことだ」と言っていただきました。私のような者に目を留めてくださったことに感謝致します。些細なことでも人のために一生懸命、無心に続けていれば、素晴らしい表彰式に招待されるという夢を与えて下さった社会貢献支援財団に心から厚く御礼申し上げます。

命の危機があったにもかかわらず、表彰式に出席する願いが叶ったのは、40歳で逝った息子が天から力を貸してくれたのかもしれません。息子がつらい時期も、私は草刈りをやめませんでした。苦しむ息子にどのように接してよいのかわかりませんでした。一心不乱に草刈り作業を黙々と続けていました。息子にすまないと思い続けてきた心のわだかまりが解けた気がします。これからは家族にしてやれなかった事を反省しつつ、実りある人生を生きて行きたいと思っています。

本当にありがとうございました。

▲県道５号線のわきは学生の通学路。後ろに見えるのは残雪が小さなウサギの姿に見える福島市が誇る吾妻小富士

▲県道５号線（フルーツライン）のり肩とのり面の清掃活動は、急こう配で危険な作業

▲東日本駅伝のランナーを応援する遠藤さん

▲県道は大型車も通ることが多いので奥様も事故防止のため片付けを兼ねて作業する

▲清掃作業はこんな高いところでも。危険を伴います

川岡　俊子

広島県

大学を卒業後、高校教師となった川岡さんは、その後、福音の光修道会に入会した。奄美大島やフィリピンに派遣され、ネパールの地では、貧困家庭の母親が小さな子どもを連れて危険な職場や環境に連れていくことから、子どもを預かる施設を1997年２月、ポカラ市に設立。子どもには将来自立できるようにと、モンテッソーリ教育を導入した。栄養面にも配慮し、保育士への感謝の気持ちと社会人としての意識を育むために、母親からわずかでも保育料を徴収し、意識改革を行った。

その結果、地元では「一番子どもたちが愛されている施設」と評判になり、資産家の子の入園希望が殺到している。ネパールは近年、核家族化が進み、中産階級が増え、子連れ出勤が不可能になり、保育園への期待が大きくなっているが、設立当初の意思を貫き貧困層の家庭の子どもを中心に預かる活動を続けている。

貧困家庭の子どもたちへの学資援助は1996年から現在も日本の恩人方の支援で続いている。現在、援助を受けて医師、看護師、教師となった子どもたちが苦難におかれた人々を支えている。川岡さんは18年の滞在後、帰国するも年に２回はネパールの施設を訪れ、後継者を見守っている。

（推薦者：NPO 法人 ANT-Hiroshima）

これまで縁のなかった晴れがましい場に招かれ、戸惑いと感謝こもごもの心境でしたが、40人の個人及び団体代表の方々にお会いし、お話しできたことは貴重な体験でした。利害を超えた場で地道に、或いは危険を顧みずに活動されていることに感嘆と尊敬の念でした。この行事のために数か月かけて準備して下さいました事務局の皆様に心から感謝申し上げます。

ネパールでは、特に貧しさとDVの苦しみの中にあった女性たちとの交わりから多くのことを学びました。彼らは素晴らしい能力を秘めているにも関わらず、置かれた環境からその宝を奪われていました。しかし、まだ時間がある。「人間は誰しも意味なくして生まれてこない。あなたは、大いなる存在の方の愛で地上に誕生した者。だからあなたの人生には意味がある」このようなことを時折話しながら、与えられた仕事への責任と役割を果たすよう励ましました。スラムや貧困地帯に住む幼子たちが「人として育つ」ためにモンテッソーリ教育法を土台として自立、自律、自己決断と実践、他人への配慮と奉仕を日々のささやかな事柄を通して学ぶよう、スタッフと子どもたちを育てました。

しかし、私一人の力ではありません。何と多くの日本の方々が関わって下さったことでしょうか。私が去った今も続いています。女性たちのひたむきな吸収の力と学ぶことへの強い関心、明るさ、素直さ、善意、笑いなどが訪れる支援者に喜びとやる気を与えているのでしょう。言葉が十分理解できなくてもお互い笑い合い、善きものに向かっている情景を見る時、国際親善はこんな身近にあるのでは、と思います。上か

らの目線ではなく共に在る仲間意識です。

向学心のある子どもたちへの支援は「勉学の恩典をラッキー！だけでは終わらせない。日本の方々の願いを他の人たちにも広げて」ということを親や子どもたちとの集まりで繰り返し言ってきました。インプットされたのでしょうか。大学生たちはスラムの子どもたちに無料の学習指導を始めました。働いている子どもたちの中には給料で村の子どもたちを学校に送っている子もいます。医師になった子どもたちは医療に恵まれない場所や人々への奉仕を始めました。彼らの生き生きとした体験談を聴いていると、ネパールの光が見えてきます。

私自身にはお金も財産も能力も力もありません。しかし、何かが出来るというこの小さく細い道を今後も歩んでいきたいと願っています。

▲セティ（白）コーラ（川）の砂利運搬　保護者のうち大半がこの河の労働者

▲自身がHIV感染者でありながら個人で胎内感染で両親を失った子どもたちを育てるラクシミさん

▲フェア湖への遠足　バスに乗る機会もあまりない子どもたちにはバスに乗るだけで大喜びです　美しい静かな湖が広がっています

▲毎朝の祈りのひととき

▲ヒマラヤのふもとのポカラ

岡山放送株式会社

アナウンス部
篠田　吉央

岡山県

岡山・香川を放送エリアとするフジテレビ系列の岡山放送は1993年から福祉をテーマにした手話付きのニュース特集「手話が語る福祉」を毎月放送している。聴覚障害者を取り上げたニュースを同じ障害がある人にも見て欲しいと画面に手話を入れたのがきっかけだが、健聴者に聴覚障害者を理解してもらうための放送にしようと、聴覚障害者の言葉である手話にこだわり、聴覚障害者自身がカメラの前に立ち手話を表現。歴代の担当キャスターも手話を学び毎回リポートしている。また、手話放送を持続可能なものにしようと、聴覚障害者・手話通訳者・テレビ局の３者で手話放送委員会を立ち上げ手話表現の検討を行っているのも特徴で、手話放送普及のモデルケースとしても期待されている。放送エリアを越え手話放送を届けられたらとインターネットのニュースサイトでの配信に乗り出したほか、手話講座の実施、手話を使った歌の制作にも挑戦していて、「手話は言語」であることを発信し続けている。

音のない世界に生きる人たちにとって「手話は言語」であり文化です。しかし、2011年に障害者基本法が改正されるまで、日本では手話の言語性は公に認められていませんでした。聾学校では長年、手話が禁止され、口の動きから言葉を読み解き発音する口話法による教育が行われていました。身体的に劣る聴覚障害者は自身の努力で健聴者に歩み寄らねばという社会があったのです。

そんな中、岡山放送では、1993年から福祉をテーマにした話題を手話表現付きで伝える月１回のニュース特集「手話が語る福祉」の放送を開始し260回以上の放送を行っています。聴覚障害者を取り上げたニュースを同じ障害がある人にも見て欲しいと画面に手話を入れたのがきっかけでしたが、健聴者に聴覚障害を理解してもらうための放送にしようと、聴覚障害者の言葉である手話にこだわり、聴覚障害者自身がカメラの前に立ち手話を表現。また、歴代の担当キャスターも手話を学び毎回リポートしています。

▲篠田キャスター

▲手話放送委員会

最大の特徴は聴覚障害者・手話通訳者・テレビ局の３者で手話放送委員会を立ち上げ手話表現の検討を行っていることです。基本１度しか見られないテレビ放送において瞬時に意味が伝わることは使命です。このため的確な表現を見つけるために３者が毎回議論を重ね本番に臨み、放送後も検証を行ってきたことが岡山放送の手話放送を持続可能なものにし25年以上継続することが出来てい

ます。

障害者への不妊手術が強制された旧優生保護法について取り上げた際には、法律の条文も手話で解説しました。「不良な子孫の出生を防止する」の「不良」をどう表現したらいいのか。自分たちを「不良」だと定めた法律に怒り、悩み、議論の末に生み出された感情のこもった手話は画面からも伝わり、放送後には、「聞こえのいい法律名に惑わされていた」という聴覚障害者からの声も届きました。情報不足に陥りやすい聴覚障害者ですが、「手話」だからこそ法律の細部まで伝えられ当事者が問題に向き合えたと思いますし、感情が伝わったのも手話が言葉だからこそだと信じています。

放送開始当時に比べると、字幕放送の普及が進み、聴覚障害者がテレビから得られる情報は飛躍的に増えました。しかし、「手話が語る福祉」ではそのタイトルが示すよう画面に手話表現を入れることにこれからもこだわります。これは単なる情報提供だけでなく、手話を言語として生きる聴覚障害者とテレビを共有することの象徴だと思いますし、障害の種類や有無に関わらず、テレビの前にいる全ての人に正確な情報を伝えたいという岡山放送のメッセージになると捉えているからです。

今回の受賞で、私たちが地道に続けてきたローカル局での取り組みが、「手話放送普及のモデルケースとして期待される」と評価いただけたこと、本当に感謝申し上げます。岡山放送では受賞を機に、放送エリアを越え手話放送を届けられたらとインターネットのニュースサイトでの配信に取り組んでいるほか、手話講座の実施、聴覚障害者向けの防災 DVD の制作、手話を使った歌の制作にも挑戦しています。

「25年かけ築いてきた聴覚障害者との絆」

バリアフリーな社会の実現を目指し、私たちはこれからも「手話が語る福祉」から手話の輪を広げていきたいと思います。

アナウンス部「手話が語る福祉」担当キャスター

篠田　吉央

←過去の放送

▲岡山市の手話言語条例可決

▲第１回放送

▲手話収録風景

NPO 法人西淀川子どもセンター

代表理事
西川　奈央人

大阪府

保護司をしていた西川日奈子さんが、虐待防止活動を通じて、子どもの相談相手や居場所など地域での支援の必要性とその重要性を感じ2007年にNPO団体として設立。電話番号の書かれたカードを配布し、親も含めて子どもの相談にのるなど、「子どもと同じ目線」でいることを大切に、非行や不登校、高校中退等で居場所のない子どもたちに、学び直しや出会い直しの場を提供している。

また、小学校1年から高校3年生までを対象に、月に4回ほど「いっしょにごはん！食べナイト？」イベントを開催し、買い出しから調理を子どもたちと一緒に行い、若いボランティアを育てる目的も兼ねて行っていて、これまでに320回以上開催している。子どもたちの状況を知るために、ゲームセンター等でアンケートを通じて悩みや抱えている問題を把握し、施設の存在を周知している。古民家を改築した暖かい施設では、子どもたちがそれぞれの悩みを打ち明けたり、大人には話せない事を、子どもたち同士で話し合ったり相談したりする光景もみられる。

（推薦者：正井　禮子）

この度は、栄えある「社会貢献者表彰」を頂き、心から御礼申し上げます。長年の草の根の子ども支援活動を、このように温かく励まして下さり、スタッフも関係者も一同で大変嬉しく思っています。

西淀川子どもセンターは、保護司や子どもへの虐待防止「CAP」の活動をしていた前代表・西川日奈子が数人の仲間に呼びかけて、2007年に活動を立ち上げました。それまでも多くの青少年と関わるなか、小学生時代などの早い段階で子どもと出会うことの重要性、事件が起こったり困難に陥ったりする前に関わることの必要性を感じ、「子どもが気軽に自分のことを話せる場所を地域に作ろう」と、公園でパラソルを立てて呼びかけるところから始めました。2008年にNPO法人となり、市営住宅での事務所ができてからは、文庫とてらこや活動（学びなおし支援）をしながら子どもが自由に遊びに来られる居場所活動を実践し、同時に地域の大人に向けての学習会やおしゃべりサロンなどをしながら、子どもが安心できる地域を作るための啓発活動を展開してきました。

ボランティアと一緒に遊んだりする中で、子どもが子どもを呼び、たくさん来てくれるようになりましたが、夕方に会場を閉める時間になっても、帰りたがらない子どもたちがいて「家に帰っても誰もおらん」「今からゲーセン行こう」と誘いあわせたりする様子から、夜間の過ごし方がだんだん気になりました。それで、2013年から「いっしょにごはん！食べナイト？」（夜間サテライト事業）の準備や練習に取り組み、2014年に本格的にスタートしました。現在は週1回程度、区内の小学生～高校生を対象に、夕食の買い出し、調理、配膳、後片付けまでを、若者ボランティアたちがサポートしながら一緒に行っています。宿題や遊びなども含み、楽しく過ごしています。現

場には、それぞれの子どもが気軽に話せる若い世代や、様々なことを教えてくれる熟年世代などもいるので、家族や学校の先生とは違う多様な大人と出会う場にもなっています。今日あったことを話しながら、誰かとご飯を食べる。そんな場面も、子どもによっては「なくて当たり前」の生活だったりします。でも、そのちょっとホッとできる時間が他人とつながる体験となり、心を育む一助になったりすればいいなと願いながら、一緒にご飯を食べる時間を重ねています。

子どもの貧困問題への社会的な関心の高まり、全国各地での子ども食堂活動などを追い風に、どこの地域にも「子どもに直接届く子ども支援」があるような社会になっていきますよう、今回の受賞を励みに、今後も心と力を寄せ合って、足元の活動を継続していこうと思います。

代表理事　西川　奈央人

▲自由時間

▲いっしょに調理

▲いっしょに片付け

▲学習支援

▲いただきます！

更生保護法人鳥取県更生保護給産会

理事長
霜村　哲男

鳥取県

刑務所から出所した、帰る所のない元受刑者を一時的に保護して、社会復帰を支援する施設として明治32年に設立。近年では出所直後から医療や福祉の保護を必要とする人が増え、高齢化が進むことで、ますます施設の一人一人に寄り添ったケアが必要となっている。

施設は地域理解と利用者の社会参加の意識を高める為に、入所者とスタッフが近隣も含め年70回程の清掃活動に参加し、冬には道路の雪かきをして、車が通れるようにボランティア活動を行う。平成25年には、薬物処遇重点実施施設としての指定を全国で初めて受け、回復支援のプログラムの開催や、自助グループによる断酒会や薬物離脱の為の会合に職員らが車で送迎をし、継続的に参加させる努力を行う。

職員らのこうした日々の尽力により、入所者の60～70％の就労率を誇っていて、住宅支援専門職員を置く事で、自立を促している。

（推薦者：中本　忠子）

この度、公益財団法人社会貢献支援財団から社会貢献者表彰を受け、誠に光栄なことと心より御礼申し上げます。

当会の沿革概略は明治30年に大赦が発布され、多数の釈放者を見るに至り、県内仏教界各宗寺院住職が広い宗教的視野に立ち、これらの人々の保護の必要性を痛感し保護会設立の準備を進め、明治32年に鳥取県出獄人保護会を創設し、爾来120年の歳月を経て今日に至っています。

平成８年の更生保護事業法施行により更生保護施設は保護観察を受ける人の中で、住まいのない人や家族等との生活が困難な人々を保護するほか、身柄の拘束を伴い起訴猶予や不起訴処分となった人、罰金科料の言い渡しを受けた人、刑務所から満期釈放になった人々のなかで、本人の希望を斟酌して保護することとなりました。

当会も中国地方のみならず九州、近畿圏と積極的に矯正施設に赴き希望者に施設の説明を行っています。近年、刑務所への入所者は減少を続けている一方で、身体の拘束を解かれた直後から医療や福祉等の保護を必要とする人の数は増えています。また、検挙人員に占める再犯者の割合や刑務所入所者に占める再入受刑者の割合は上昇しています。ひとたび罪を犯すと社会の居場所を失いがちです。

鳥取県は国の指針を受け平成30年に「鳥取県再犯防止推進計画」を策定しました。それに伴い当会も県、市、検察庁、警察、矯正施設、定着支援センター、自立支援センター、包括支援センターと強固な連携を取り、積極的に再犯防止に取り組んでいます。多少ですが効果が表れていることを実感しています。特に薬物重点処遇施設として週２回の依存症回復プログラム、週１回の自助グループＮＡ、断酒会への通所等で依存症の回復に実績を上げています。また、当会地区も高齢化が進んでいますが、近隣の清掃活動、雪かき等、10年来の地道な地域貢献活動により地区住民には頼られる

存在となっています。

更生保護施設の役割は今後大きくなっていくと思います。今回の受賞を励みに役職員一同積極的に更生保護に取り組んでいく所存です。

この度はありがとうございました。

理事長　霜村　哲男

▲給産会外回りの清掃　草取り作業

▲更生女性会他　寄付物品食料品を寮生に福袋として渡す

▲国立公園鳥取大砂丘一斉清掃

▲鳥取市冨桑地区一斉清掃川清掃に参加

▲寮生　職員による防災訓練

▲外部看護師による健康相談　2 か月に 1 回

社会福祉法人ステップさが

理事長
深川　英之

佐賀県

障害や病気などにより、地域で自立した生活を送ることが困難な人々を、囲って保護するのではなく、地域にも見守られつつ、できるだけ外に出て社会で一人で自立して生きていけるようにしてあげたい！という熱い思いの有志によって平成19年12月にNPO法人を設立した。基本的な生活習慣、職業習慣および社会生活技能を身につけてもらい、一般企業への就労支援を目的に、働く環境づくりや、身体的、知的、精神、発達と様々な障がいの特性と個体差を十分に考慮し、何ができて何ができないのか、本当にできないのか甘えによるものなのか、などを見極め、障害への必要な合理的配慮を行いつつも、時には厳しく忍耐強い指導・訓練で、自立を目指している。

「就労訓練」なので教育的要素が大きいが、自分でできた時の喜びを知り、心も一緒に育っていって欲しいという考えで利用者本人やそのご家族ごとにきめ細やかな対話を常に心掛けている。屋内で野菜の水耕栽培を行う「活き活き工房夢ファーム」や「まる工房」など障がいがあっても外作業、食品加工、事務作業など、その人の可能性を引き出せるような様々な作業体験から自立と就労を目指す。企業への事前の実習を多くすることで双方の理解を深め、就職率の向上にも繋げており、就労後も就労先と障がい者間の橋渡しを行って、行き違いや問題発生を最小限にとどめ、長期の就労を目指している。

（推薦者：香月　武）

「受賞に感謝して」

ステップさがはNPO法人ステップ・ワーカーズとして平成７年に障害者福祉サービスを開始し、平成30年に社会福祉法人ステップさがに衣替えし現在に至っています。

私どもステップさがの特徴は障害者の自立訓練から就労継続支援、一般就労まで支援サービスを幅広く展開し、それにより利用者の希望や状況に合った支援を行っている事です。最近では社会生活や人間関係に適応するのが難しい方の相談も多くなっていますので、ステップさがでは自立訓練（生活リズムを作る訓練）、Ｂ型事業所（事業所内で工賃を稼ぐ働き方）、移行支援（企業への就職活動をサポート）とさまざまな選択肢を用意しています。

具体的には、いきなり就職活動が難しくても、社会に出るための準備段階として自立訓練（生活訓練）事業所の「ステップ・ONE'S」で生活のリズム、社会性を身につける方法もあります。「ステップ・ONE'S」は、社会生活の第一歩ということで名づけています。

「ゆくゆくは企業就職を目指したいが今すぐには自信がない」、「毎日行けるのか不安」、「朝から夕方まで長時間人と接するのが不安」といった方々には、まずは自分のペースで仲間と一緒に仕事が出来る就労継続Ｂ型事業所を用意しています。ステップさがでは「活き活き工房　夢ファーム」と「まる工房」の２つのＢ型事業所を運営しています。

「夢ファーム」では室内で水耕栽培の野菜作りを行っています。気候に左右されず種まきから収穫までの作業を繰り返し行っていきますので、得意な作業を探しながらご自身の役割を果たしてもらうことができます。そして何より、緑色に囲まれ精神的にも落ち着き、自分が育てた野菜を収穫する喜びを感じてもらうことができています。

一方「まる工房」では手作り無添加ジャムやケータリング販売を手がける食品部門、名刺印刷やパソコンでのデータ入力を行う事務部門、施設の除草作業や農家の作業を手伝いに出向いていく農園部門の３部門があり、さまざまな作業体験が出来ます。

この様にこれまで就労に向け幅広い支援体制を整え活動をしてきましたが、今回のこの受賞を機に、更なる支援活動を推進してまいりたいと思っています。

ありがとうございました。

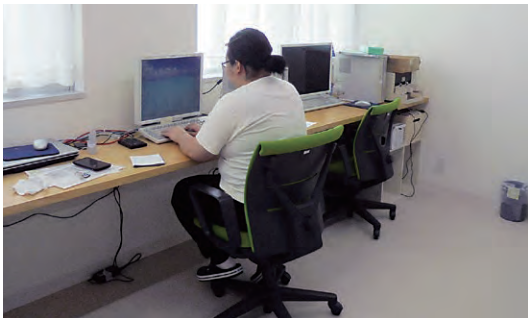
理事長　深川　英之

▲除草作業

▲ジャム製造

▲トリミング風景

▲私たちが育てています



▲事務作業

社会福祉法人神戸いのちの電話

理事長
水野　雄二

兵庫県

様々な心の悩みや人生の危機に直面して、相談相手もなく、孤独の中で生きる力を失いそうになっている人たちにボランティア電話相談員が隣人として支え、生きる希望を育んでもらおうという願いから出発した市民活動で1981年に発足した。1995年の阪神大震災後も１ヶ月足らずで業務を再開し、2001年には365日化を実現。養成講座を受講したボランティアが交代で電話相談員となり、根気強く傾聴。相談者が想いを語る中で、何かしら自分自身の気付きに導けるようにと活動をしている。

電話相談員はボランティアながら、相談者から心無い言動で傷つけられることもあるが、この団体ではスーパーバイザーを付けて、相談に応じる体制をとっている。これまで３万人にも上った自死の数が、ここ数年２万人前後になっていることは、こういった活動による成果でもある。自殺をほのめかす人に対して、“今日は止めようね、明日また電話をかけてね”と伝えることは、まさにその名の通り、いのちの電話となっている。

（推薦者：橋本　明）

この度、第53回社会貢献者表彰の選考に際し、受賞の栄を受けることができましたことに心から感謝申し上げます。

私たち、神戸いのちの電話は、様々な心の悩みや人生の危機に直面して、相談相手もなく、孤独の中で生きる力を失いそうになっている人たちに、ボランティアの電話相談員が寄り添い、傾聴し、困難や苦難、孤独の中から一歩前に踏み出す働きを続けています。1981年に発足して以来、ほぼ毎年、年間12,000件の相談を受け付け、365日間休むことなく、約140名のボランティア相談員が受話器を握り、ストレスと闘いながら､少しでもコーラー（通話者）の力になろうと励んでいます。その相談内容は、多岐に亘りますが、多くは人生そのものや生きがいに関すること、家族や友人などの対人関係に関すること、経済的な困難や仕事に関すること、そして、健康問題に関することなど様々な悩みや辛さが吐露されます。どのテーマに関しても相談員は根気強く、傾聴に徹して対応していきます。

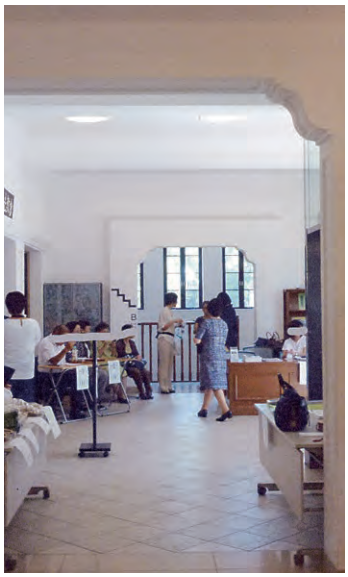
この相談員を如何に獲得し、養成するかも団体としての大きな課題です。新任の相談員を獲得するための１年半に及ぶ相談員養成講座や現行の相談員のための継続研修も１年を通して実施され、その受講が義務化されています。このような相談員の質の向上は適切な電話相談では不可欠のこととなります。

また、電話相談だけでなく、法人を維持するためにボランタリーな委員会活動や部活動を積極的に展開し、イベントやバザーなどを通して資金を獲得し、法人を財政的にも支えています。イベントやバザーでは、その企画、準備、実施に至るまで相談員がボランティアとして貢献し、法人を支えているのです。そして、これらの活動を支える役員（理事・監事・評議員）も全員ボランティアとして、多忙な中の時間を割い

て、理事会などの会合を運営しています。

統計上の自殺者の数字は2012年から年々下降を続けており、最多で３万人を超えていた時代と比して今は２万人少しに減少しています。しかし、神戸いのちの電話を訪問する電話相談は減ることもなく、むしろ増加しているのではないかと思われます。社会の混迷が益々深くなり、人々の悩みも複雑化する中で、私たちの活動も更なる進化と深化が求められます。今般の社会貢献者表彰はそのような私たちを大いに励ます機会となり、益々力を得て、次の目標に向かって前進したいと思っています。改めて厚く御礼申し上げます。

理事長　　水野　雄二


▲物販販売　受付様子

▲挨拶する理事長

▲電話相談ブース内

▲養成講座一泊研修の様子

▲当団体主催関西学院グリーククラブイベントの様子

宮崎　慶文

東京都

厚労省統計によると2019年４月30日現在、中国残留孤児の「永住帰国者総数」は2,557人。中国帰国者の個人的事情は、年齢・生活の貧富・育ち方・学歴・日本語が話せるかどうかなど千差万別である。周りの人が手を差し延べたくても個別の対応は難しく、集団となるとなおさら困難である。

日本に帰国して21年になる宮崎さんは、中国で大学教授であった経験を活かし孤立しがちな帰国者のために、弁護士指導のもと2009年「NPO法人中国帰国者・日中友好の会」の設立に貢献。同会では、日本語教室、中国語教室、日本舞踊、中国舞踊、合唱団等の教室を週替わり、曜日ごとに開催。先生は全てボランティアで教えており、参加者はそれぞれの教室で約５～10人。宮崎さんは、中国語教室で指導しているほか、近年、中国をはじめとする外国人の居住者が多く、診療所や病院などで医者と患者の通訳も行っている。

帰国者の孤立しがちな日常をサポートし生活向上に努め、帰国者と市民をつなぐ活動を続けている。

（推薦者：笠原　五郎）

私は公益財団法人社会貢献支援財団から第53回社会貢献者表彰受賞決定のお知らせの手紙をいただきましたが、予想もしていなかったことで本当にうれしいです。特に11月25日の表彰式典で安倍昭恵会長から表彰状を頂き、とても感動しました。言葉を越えて感激でいっぱいです。

私は70年前、戦争のために中国の大連で父と生き別れになり、ちょうど１歳の時に孤児になりました。中国人の養父母が私を引き取って自分の子どものように苦労して育てて、小学校から大学卒業まで全部養父母のお金で助けてくれました。養父母の海の奥深くへの恵み、一生忘れられないです。私は毎年、家内と一緒に養父母のお墓参りのため中国へ行きます。

私は中国で26年間仕事をしていました。中国人民によって私は培われ、大学の教授になりました。帰国後、どうやって中国人民に恩返しをしようかとよく考えています。

2008年、中国の四川省で大地震が発生しました。たくさん学校が崩れ、われわれ全国の孤児たちは、生活費を節約して１ヶ月ぐらいで1,700万円を集めました。このお金の使い道を考え、中国の大使館と中国外務省と中国教育部などの部門に送りました。やっと、2010年になって中国の四川省に太山村小学校が建てられました。私たちはこの間、代表団として３回、この小学校へ慰問に行きました。

私と家族４人は1997年２月、永住のために帰国して22年になります。帰国してから、私は自分の生活のため、地域住民交流のため、日中友好のため、必ず日本語を一生懸命に勉強すると決意しました。私は51歳から日本語を勉強し始めたばかりです。困難を乗り越え、拓殖大学で９ヶ月、日本語の勉強をしたあとに虎ノ門の民間日本語学校

で１年半位、さらに笠原五郎先生の日本語教室で８年間勉強をしました。平成30年２月、東京セントラルライオンズクラブ開催の第33回中国帰国者日本語発表会で、私は最優秀賞を頂きました。一方、帰国して22年間、私は地域の日本人に中国語を教えてきました。教え子はだいたい300人になりました。

また、大田区中国帰国者センターの医療担当になりました。2008年、池田澄江理事長と協力して、NPO 法人中国帰国者・日中友好の会設立のため、各種資料を作成し、整理して東京都に提出し、同年９月に東京都から承認されました。私は責任者として、いろいろな教室をつくりました。帰国者たちは老後の生活を毎日楽しみにしています。毎年、私は会員を連れて台東区の老人ホームと大田区の老人ホームに慰問に行き、出し物をしています（合唱、日本舞踊、楽器の演奏、中国舞踊と太極拳など）。

▲2017年６月　中国北京人民大会堂にて　中国帰国者・日中友好の会のメンバー102人とともに

NPO 法人中国帰国者・日中友好の会の十八番が餃子を作ることで、東日本大震災の時には皆で手づくり餃子を9,000個用意しました。我々幹部の８人が２台のマイクロバスを借りて夜に岩手県へ出発し、翌日の朝、到着してすぐに餃子を茹でて、スープを作り被災者たちに温かい餃子を食べてスープを飲んでもらいました。我々の気持ちも晴ればれしていました。

▲中国帰国者・日中友好の会　設立総会

笠原五郎先生と武井優先生が私を社会貢献者表彰に推薦してくださり、受賞することができました。心より感謝しております。同時に公益財団法人社会貢献支援財団の選考委員の皆様とスタッフの皆様に感謝しております。

今後、私は自分自身を励まし、日中友好事業のため一生懸命に貢献したいと思います。

▲2010年　四川省眉山件太平村小学校を訪問

南雲　和子

新潟県

南雲さんの娘さんが小学校でいじめに遭い、中学校へ入学後不登校になったが叱咤激励し登校させていた。当時は学校信仰が強く、学校に行かないという選択ができない中で、1995年に娘さんの同級生の男子生徒がいじめにより自殺するという事件が発生した。この事件にショックを受けた南雲さんは、不登校の子どもを抱えて悩む母親たちに市民や教師なども加わったなかで、「教育を共に考える市民の会」を発足させ活動。その後、同会を廃止後、1999年に新たに自宅を開放し、同じ悩みを抱える母親５～６人で「居場所じゃがいも・じゃがいも親の会」を設立した。

毎週水曜日、特に教育的な課題もなく、自由なおしゃべりと食事の会を10人程の親子が集って開催した。中には、車で片道２時間もかけて新潟市から参加する親子もいた。特に設立後12～３年は、同会を維持するためにスーパーのレジや新聞配達をして経費を捻出した。同会は現在も当時参加していた子どもなどが集まる中で、活動を続けている。

（推薦者：居場所じゃがいも・じゃがいも親の会）

2019年11月24、25日は72年生きてきた中で、とても緊張した時間でした。上越市から上京し、「帝国ホテル」という初めて足を踏み入れる、素晴らしい場に辿り着くだけで、クタクタのいわゆる「お上りさん」でした。

到着したホテルも広くて扇の間を探し、如才ない写真スタッフさんの誘導で、自分でもびっくりするようにポーズを決め、パチパチとたくさん写していただき緊張感が少し和らぎました。

その後のチェックインの手続きが長蛇の列でしたが、このホテルでの結婚式に参加された方々の、美しい晴れ着姿を見せていただいたり、多数の赤と小数の白いバラの花の、大きなフラワーボールを眺めさせていただいたり、列の前に並ばれていた、見ず知らずの女性たちとお話をしたりと、チェックイン手続き待ちの時間を楽しくクリアーできました。そして、ボーイさんに案内していただいたお部屋はタワー棟22階の眺めのよいお部屋でした。

夕方の懇談会では各地での社会貢献活動を、短い自己紹介の中から知ることが出来ました。が、発言される代表の方々は、私と同年代とお見受けされる男性が多くて、その発言者の回りで、細かく動いていらっしゃるスタッフさんたちに思いを馳せながら、傾聴いたしました。

ホテルのお食事を頂戴することに専念し過ぎて、ご一緒のテーブルの皆さんとの会話が進まなかったことが反省事項です。

翌25日は表彰式本番です、６時30分からの和朝食を頂戴して、式典に臨みましたがやはり緊張でいっぱいでした。推薦して下さったＴさんにお会いすることができ、Ｔさんのお知り合いの方たちにも紹介していただいたり、Ｔさんの美しいピンクのスー

ツ姿などに、緊張感を緩和させたりしながら、リードして下さった白いお洋服の女性のお陰で、式典リハーサルも難なく済ませ、両隣の受賞者の男性たちとお話も出来るようになりました。

表彰式本番では、参列して下さった方々の多さに驚きました。安倍会長から表彰状を渡されたり、ツーショット写真を写していただいたり、本当に非日常な時間でした。

1999年のじゃがいもの花が美しい６月、主に不登校の子どもやその保護者たちと「居場所じゃがいも・じゃがいも親の会」を開き、満20年が過ぎました。遺族年金暮らしなのでこの活動も経済的に無理かなと思い、そろそろ閉じようかなと考えていましたが、副賞でもう暫く続けることが可能になりました。嬉しいです。ありがとうございます。

▲「七夕かざり」は忘れられない思いでが…

▲トワイライトエクスプレスを見に直江津駅に。見るだけ…

▲みんなでトランプ

▲居場所　やりたいことをしています

▲オヤツタイムかな…

一般社団法人学術の森

理　事
中村　信二

福岡県

家庭教師派遣ビジネスをしていた中村理事長が、母子・父子家庭や貧困層の子どもたちが学校の授業についていけない、勉強したいけれども塾に通う費用がないなどの理由で、将来や夢をあきらめる子どもの存在を知り、2013年に福岡市に無料の学習塾を開講。

福岡市の中心の天神で日曜以外の朝10時から夜９時の間、常駐する講師からいつ来ても勉強を見てもらえ、学習方法や進路の相談にも対応し、参考書の貸出し、コピーを無料で行える等の環境も整えている。不登校の中学生は、学校への働きかけで出席扱いにもなる。また、IC で出入記録を管理し親御さんへの報告を可能にしている。

６年目を迎えた同団体の利用者は延べ2,000名を超え、講師は学生を除き無償で５～７名が常駐している。通常月４万円程の塾代が無料。運営費用は地元企業を中心に寄付を募っていて、１社月額３万円と決めていて、大口はあえて受け付けていない。対象は母子・父子・貧困家庭に限ってはいないが、優先で受け付けている。

（推薦者：福園　倫恭）

この度は公益財団法人社会貢献支援財団より、名誉ある賞をいただき光栄に思いますとともに、心より感謝申し上げます。

わたしたちが運営している一般社団法人学術の森は、勉強したくても勉強できる環境がない、塾に行きたくても費用がない子どもたちのために開講している無料学習室です。ここでは、自習スペース、ネットでの映像授業、辞書や参考書、問題集などの教材、コピー機を全て無料で利用することができます。2013年に福岡市の中心地である天神に場所を構えて以来、利用している子どもたちの数は延べ2,500名を超えました。もちろん、自習スペースで黙々と学習する子もいますが、勉強していてつまずいた時は、常駐の講師に質問することができるので、その場ですぐに疑問を解決することができます。また、最近では不登校の子どもたちが学校以外の居場所を求めて利用するケースも多く、時間にとらわれることなく、好きな時間、自分のリズムに合った時間に自分のペースで勉強できるので、彼らにとって通いやすい雰囲気であるようです。そして、頻繁に通えるようになった中学生は学校への働きかけで、今では出席扱いにしてもらえるようにもなりました。ここを利用したことをきっかけに、復学や高校、大学への進学を果たした子どもたちもたくさんいます。今や学ぶ場所はひとつではなく、それぞれに合った環境を与えただけで、こんなにも成長するものだと改めて子どもの秘めた可能性に驚いています。これからの日本を活気づけるためには、将来を担う子どもたちの力が不可欠です。そんな子どもたちをひとりでも多く育成できるように、より一層環境の充実に努めたいと思います。

今回の式典にはスタッフ４名と共に参加させていただきました。そこでは、様々な分野で活躍されている異種多様な方々と交流することができ、大変な刺激を受け、そ

してたくさんの気付きがありました。この経験を今後の活動に活かすことができるよう、益々努力していく所存です。誰もが自由に平等に使える学習場所の提供という小さな一助ではありますが、継続していくことでそれが大きな力になればと考えています。今回はこのような機会を与えていただき本当にありがとうございました。

理事　中村　信二

朝日新聞（夕刊）　2014年（平成26年）4月28日　水曜日

おいで 無料学習室

家庭教師派遣会社が社会貢献

天神 塾通えない子のため

▲新聞掲載

2014年（平成26年）5月10日（土）夕刊　毎日新聞

「無料塾」の夢実現

福岡の家庭教師派遣会社

天神に昨年オープン

「経済理由で通えぬ子のために」

▲新聞掲載

▲学習の様子

▲学術の森主宰記憶力セミナー

▲指導風景

▲目標カード

秋山　悦子

静岡県

1977年、第２子出産後に難病のベーチェット病を発症した。原因不明のこの病気は失明の危険性が高く、指定難病対象疾患となっている。患者は全国に約18,000人いるとされ、シルクロードに沿った地域に多く発症していることから別名「シルクロード病」と言われている。

秋山さんは２人の幼子を抱えて不安な中での療養生活で、様々な苦労を経験したからこそ少しでも同じ病気を持つ患者の役に立ちたいとサポート活動を行っている。全国組織であるベーチェット病友の会静岡県支部だけではなく、本部でもピアサポート（同じ病状や悩みを持ち同じような立場にある者同志支えあうこと）を行っており、更に静岡県難病団体連絡協議会でも相談員としてピアサポートを行い年間200件近い相談を受けている。この他、厚生労働省のベーチェット病研究班会議や研修会にも積極的に参加し、専門医とコミュニケーションをとるなど、自身も病気と闘いながらこの病気に対する知識を深めて相談者への的確なアドバイスに生かしている。

又、ベーチェット病だけではなく、富士市難病患者・家族連絡会の地域難病団体において専門医を招き、難病患者のために定期的な相談会や会報誌「市難連ふじ」の発行を通して多方面からのサポートを行っている。

（推薦者：NPO 法人静岡県難病団体連絡協議会）

過去の受賞者を見ると、皆さん多くの苦労をされて受賞されている方ばかり。私なんかでよいのだろうか？と…。

第２子出産後、体に変調をきたし市内の病院に受診した結果、医師より「ベーチェット病という難病で目が見えなくなる病気」と言われ、頭が真っ白になった事を今でも忘れることは出来ません。幼な子２人、目が見えなくなったらどうして育てようかと…。

毎朝、目覚めた時「ああ。今日も見えている」と、見えない神にどんなに感謝したことか。

ベーチェット病に罹患して42年の歳月が過ぎましたが、ともすれば盲人になる可能性のあるこの病気の不安が常にありました。３年前、再び症状が現れこの病気が難病で完治することがないと再認いたしました。幸い、眼の症状はなく服用薬で落ち着きました。眼の炎症は発病初期に少し現れただけで、現在まで見ることが出来ています。

医療機関に勤務経験があり、医学知識が少しあったことから、ベーチェット病患者さんや難病の方から相談を受けることが多々あり、目の見えている私は以前より「何か患者さんの役に立ちたい」という思いがあり、症状が落ち着いてから積極的に患者会とのかかわりを持ちました。

国の政策として難病相談（ピアサポート）に力を注ぐようになり、各都道府県に難病支援センターが設置され、本格的な難病患者によるピアサポートが始まりました。私はベーチェット病のピアサポーターとして、又、現在はベーチェット病のみならず、他の難病も患者会と連携を取りながらサポートをしています。

年間、約200件近い相談を受ける中、私自身も様々な相談に遭遇し、相談者に応えられなかったり、誤診から若い命が奪われたり、何もできずに忸怩たる思いや後悔の念を抱きながら相談者と向かい合ってきました。

今回このような過分な賞をいただき、更に今後も難病患者がより良い療養生活を送るために、少しでもお役に立てればという思いでおります。

▲国際ベーチェット病患者会に参加　ドイツ　ベルリン

▲製薬会社でのベーチェット病についての講演

▲富士市難病患者　家族連絡　役員メンバー

▲イギリス人の患者　ヘレンさんと

▲ピアサポーターとして面談による相談者対応

▲国会請願署名運動

有光　武元

福岡県

陶芸家として北九州の門司で工房をかまえる一方で、若いころにフィリピンの洋食器製造プラントで指導者として働いていた経験と人脈を活かして、長きにわたってフィリピンの子どもたちへの支援活動を行っている。

ロータリークラブでの国際奉仕活動がきっかけとなり、2003年からフィリピン各地で井戸の設置、学校や集会場、図書館の建設、農耕指導とそれに必要な水牛や食物の種の寄付など多くの支援を行ってきた。物質的な支援のみならず、ロータリークラブ時代の仲間と分担し、現地の貧しい村の子どもに奨学金を出し、大学院まで卒業させるなどの支援も行った。その子どもが就職して結婚し、生まれた子どもが小学生になった今でも家族同様の付き合いが続いている。日本では、毎年自らの工房でフィリピンでの活動写真や資料などを展示･紹介しながら「チャリティ窯開き」を開催し、陶器を展示即売して資金集めを行い次の支援につなげるなど精力的に活動している。

子どもから感謝の手紙をもらったり、喜ぶ顔を見るとたまらなく嬉しいと語る有光氏は、現地の人が何を必要としているのかを第一に考え、よい人間関係を築き、自分の糧にもしてきたことで、ここまで長期にわたる支援につながっている。

（推薦者：矢野　敏行）

令和元年も後数週間を残します中、お招きいただきました帝国ホテルでの懇親会と華やかな表彰式典を思い出しつつ、この感想手記文を記しております。

24、25日におきまして光栄にも40組もの素晴らしい活動をされております皆様方にお目に掛かることができました。懇親会の席ではご苦労の中､活動されておられます方々の話を聞く事ができ、皆様方と比べて私の拙いフィリピンでの活動が社会貢献者表彰の受賞に値するのだろうかと、正直恐縮いたしておりました。

25日の式典が進行していく中、フィリピンで行いました数々の支援事業と訪れた場所が思い出されておりました。2003年に私の初めての支援事業でバタンガス州カラヨ村の小学校に図書館建設と図書の贈呈を行いました時のことが思い出されました。まだ携帯電話や PC、E-mail などが僻村に普及していない時、通常の国際電話と Fax で私の下手な英語により校長先生との連絡を上手くとりあえなかった経験を思い出しました。

数ある活動の全てが順調に成功したのではなく、途中で挫折し失敗した活動もありました。村の首長に預けていた井戸掘り支援の費用が、選挙で落選してしまったために消えてしまったこと、支援地区に共産ゲリラが出没し地区での活動が禁止になり、小学校の支援を中止したり、奨学金制度の中、奨学生１人に年間40,000円を支給しているはずが、22,000円しか支給されておらず、４年間気付かないまま横領されていたりと、寂しい思いをしたこともありました。

またフィリピンは過去の太平洋戦争で50万人以上の将兵が亡くなられた国ですので、活動しておりますと何度かその悲しい歴史の場所を通って支援地へ訪れる事があります。リサール州アンティポロ　カラウィ　アピアに農耕支援と教育支援活動に向かいましたが車は入れませんでした。馬で訪れた先住民族ドマガット族の住む深い山岳地のまわりでは20,000人以上の将兵が亡くなられたと伝えられています。神風特攻隊が編成されたタールラック州マバラカットの山岳地で、未だ先住民 AETA 族が TENJINYAMA （天神山）と呼んでいる生活拠点を水利施設支援活動で訪問したことがあり、何度かお線香を持ちながら訪問した経験などがあります。

フィリピンへ通うようになりまして17年間、今までに沢山の思い出と素晴らしい出会いをいただきながらの支援活動をして参りました。“マガンダン ハポン！”“カムスタカ？”タガログ語で（こんにちはげんきですか）と声をかけると不思議そうに、恥ずかしそうにしていた子どもたちが必ず弾けるような笑顔を返してくれます。陸の孤島のような僻村や山岳地の先住民族の子どもたちとの出会いの中で何度も経験した情景です。私にとりましてその時の喜びが恵まれない環境の中で生活している子どもたちに手を差し伸べて来た一番大きな要因になっているのではと思います。

奨学金制度の創設は、過去にロータリークラブのメンバーであったことで友人たちに何度となくスポンサーとして参加協力をお願いすることができ、現在も15人の学生の支援を行っています。教育の機会を与えられたことで子どもたちの生活や人生が変わることを、大学院へ進学して公認会計士、弁護士試験に受かった卒業生たちを見て実感しております。お陰様で、私も支援した子どもたちが素晴らしい社会人に成長して、マニラに４人の孫？を持つことができております。

フィリピンでのこの活動は私個人ではとても17年間も続けることは出来ませんでしたが、私の陶房で行いますチャリティー窯開きに集まる皆様と友人たちの協力のお陰を持ちまして活動が出来た次第です。

フィリピンで出会った沢山の人たちとの喜びの出会い、今回の社会貢献者表彰受賞という名誉ある機会をいただくなど、沢山の皆様方の協力をさておき、私のみが一番素晴らしい機会をいただきますことは誠に恐縮の限りでございます。

私自身、齢79歳。ややくたびれを感じる年齢になっておりますが、この度の授賞を励みに後数年は頑張らねばと覚悟いたしております。

この度の身に余る社会貢献者表彰の受賞、誠に有難う御座います。

MALAMIN SALAMAT PO, MABUHAI！

大変有難う御座います、万歳

▲パサイ市立 PLP 大の20人に奨学金　2005年

▲日本語で書かれた感謝の横断幕　2014年バナイ島マグラグ

▲先住民ドマガット族に農耕用の水牛４頭を贈る　2007年リハール州の山岳部アピア

▲山間部の小学校に湧き水を引いた水道が完成　2013年　ルソン島中部オロガンボ

THU YA SOE

沖縄県

2014年に、妻と共にミャンマーの貧困地域で学校に通えなかった子どもたちのために政府の許可の下、私立幼稚園･小学校を設立。沖縄でミャンマーレストランを経営しその売上を運営資金に、日本の大学で学んだ教育方法を取り入れた学習指導を特色としている。

子どもたちは弁当を持参するが、栄養が偏っていたり、所得格差がおかずに顕著に表れることから、ソウさんは琉球大学の研修生として栄養学を学び、2016年から日本の給食制度を学校に導入。週２回、ソウさんの立てた献立を基に教師が調理する。保護者会では、沖縄の郷土料理である混ぜご飯（ジューシー）の作り方を紹介し、この１品の料理で多くの栄養素が取れること等を紹介。また朝食に駄菓子など甘いものを買って持ち込む生徒が多い中、近隣の店を調査し、売られているのは合成着色料や甘味料のついた成長期の子どもには害になる菓子ばかりであることを伝えた。さらに炭水化物に偏りがちな食生活にカルシウムやビタミン等、栄養学の基礎を親に伝え、子どもと双方に食への意識改革を行う取組みをしている。

（推薦者：チョ　チョ　カイ）

このたび、第53回社会貢献者表彰の受賞者として式典に出席することができ、またこのような素晴らしい賞を頂き大変光栄に思っております。まず、社会貢献支援財団会長の安倍昭恵様をはじめ、事務局の皆様に、心より感謝申し上げます。そして、私の活動を支えてくれているミャンマーの家族、愛の家小学校の教職員たち、児童の親御さんたちにも感謝したいです。このような素晴らしい賞を私に与えてくださったことは、今後の私の活動にとって大きな励みとなります。2013年に設立した愛の家小学校を、これからももっともっと素晴らしい学校にするように、少しでも理想に近づくように頑張っていきたいと思っています。ミャンマーから遠く離れた日本でも、このように応援してくださる方々、温かい方々がいらっしゃることは、私にとって本当に心強いです。

私は今沖縄で、ロイヤル・ミャンマーというミャンマー料理のレストランを経営しており、その収益でミャンマーの愛の家小学校の運営をしております。私は日本の琉球大学で学んだ成果を小学校の運営に活かしています。それは、単なる暗記教育ではない、日本の教育に近い教育をミャンマーで実践しているのです。ミャンマーでは教師が一方的に教える暗記中心の教育ですが、愛の家小学校ではなるべく子どもを中心にした、考える教育を実践しようと頑張っています。また、日本では学校給食は当たり前のように提供されていますが、ミャンマーでは学校給食制度はありません。子どもたちが持参するお弁当には格差があり、また栄養の偏りもあります。私は、まずそれを改善しようと思い、琉球大学で栄養学と小学校教育を学んで、そして日本の給食制度を導入しています。栄養学の基礎知識を親に伝えて、子どもたちとともに食への

意識改革を行う取り組みをしております。本当は、日本の小学校と同じように学校給食を毎日提供したいのですが、その予算がないため週に学校給食２回とおやつ１回の計３回の提供をしています。これからは、学校給食を毎日提供できるように頑張っていきたいと思っております。

将来は中学校、高校まで同じ教育方針の学校を設立することを目指しています。愛の家小学校の教育方針をミャンマーの中学校、高校まで広げていくには、まだまだたくさんの方々のお力添えが必要です。これからも皆様のご理解、ご支援をどうぞよろしくお願いします。今回頂いた賞金は愛の家小学校のために大切に活用させていただきます。

最後に、社会貢献者支援財団の皆様、日本財団の皆様に重ねてお礼申し上げます。式に出席して私は今までこのような賞をもらったことがなかったので、大変嬉しく思っています。53回も続いている社会貢献者表彰や、社会貢献活動者たちを支えてくださっている社会貢献支援財団を心より尊敬しております。式で社会貢献のために頑張っている様々な方々と出会って、様々なことを聞くことができて、とても貴重な機会でした。社会のために色々な立場で、また、世界の人々のためにそれぞれの国で活動しているのを見て、とても感動致しました。安倍昭恵会長から、直接この賞を頂いたことも、私にとっては人生で忘れられないことです。日本で、こんなにも高名な方にお目にかかることができて、とても光栄なことと思っております。より良い社会を作っていくためには、社会のために働く人たちが必要です。私はその一人としてこれからも良い社会を創っていきたいと思っております。また、良い社会を作るために、社会貢献支援財団のような方々が支えてくださることも大事なことと思っております。

本当にありがとうございました。

ミャンマー国（沖縄県在住）

▲沖縄で経営するレストランの前で

▲栄養満点の給食

▲持参するお弁当はゆでたまごとご飯のみ

▲お弁当はごはんと乾燥魚

特定非営利活動法人リトルワンズ

代表理事
小川　訓久

東京都

2009年から東京都杉並区を拠点に小山訓久さんによって始められた母子家庭と子どもたちを支援するNPO法人。主な事業として、母子家庭の就労支援、住まいの提供、情報支援、子どもの体験の格差をなくすために習い事に特化した補助金を贈る「小さな一歩応援プロジェクト」の実施、毎月開催される子どもたちのためのイベント、子育て中の親子が利用できる「親子カフェほっくる」の運営がある。

活動のきっかけは、約10年前、テレビ番組の制作をしていた小山さんが約100人の母子家庭にインタビューして、その実情を知ったこと。メディア業界を辞めて、母子家庭支援のNPOを発足した。当時は子どもの貧困が注目される前であり、母子家庭の窮状にも理解を得られにくかった。その後、住まい探しが難しい母子家庭と、社会問題であった空き家の解決を１つにつなげ、全国に先駆け空き家、空き室を活用した支援モデルを構築。母子家庭に特化した居住支援を行う「居住支援法人」として東京都より指定を受け、優れた居住支援モデルを作ったことにより、World Habitat Awardsの2018年最優秀賞を受賞した（日本の受賞は16年ぶり）。

これまでに300件以上の家庭に住まいを提供し、10年間で2,000件以上の相談を受けている。会員は約1,600人。全国からの相談に対応している。

この度は、NPO法人リトルワンズに歴史ある賞を頂戴したことに、大変栄誉を感じております。長きにわたり、子ども、女性の支援を行ってこられた諸先輩方のご尽力があったからこそ、リトルワンズのような若い団体も活動できております。誠に感謝申し上げます。

10年前は、「日本の子どもの貧困」について、ほとんど知られていませんでした。知られていない社会問題に対して、行動を起こすことも、男性が女性の支援団体を作るというのも大変珍しがられました。活動についても、ご理解をいただけないことは多々あり、失敗も一度や二度ではありません。たった１つの冴えたやり方などなく、状況に応じて、出来ることを選択して、行動する。あとで間違いに気付き、後悔する。その繰り返しでした。お母さんと子どもたちの喜ぶ顔を見て、良かったと思いつつも、「はたして本当に良かったのだろうか」と反省をする日々。本当に頼りのない団体でした。一方的な支援ではなく、母子家庭のお母さんと子どもたちと一緒に考え、フェアな関係で、「今」必要な支援を共に作っていく。そのようなスタイルが出来たのは最近です。関係性の積み重ねがあったからこそだと信じています。

現在、ニュースでは「子どもの貧困」について取り上げられることが多くなり、支援団体も増えて参りました。かつては想像もできなかった状況です。ところが、子どもの貧困、女性の貧困は未だ解決はしていません。私ども、現場の団体の力不足を感じておりますが、同時に、再考の時期だと思っています。子どもの貧困には特効薬はありません。１つの方法、１つの団体で解決できるものではないですし、１つの行政

で全ての支援を担うことも現実的ではありません。子どもと母親を取り囲む複数の状況に対して、複数の団体がそれぞれに解決策を提案し、そして、その解決策が有機的につながっていき、地域に合ったカタチで実装していくことが重要です。

リトルワンズは、「住宅」と「情報」について、ある程度の解決策を提示してきました。また、「体験の格差」についても、いち早く警鐘を鳴らしたと自負しております。「教育」「運動」と他の分野でも解決策を提示しているNPO法人はあり、日本全国で、地域に合ったカタチで活動をしている団体も多くあります。私は、子どもの貧困、女性の貧困の解決を諦めてはいません。それぞれの団体がもつ「想い」と「技術」が繋がっていくことを大いに期待しています。そして、そのような団体を発掘し、繋げてきたのが、公益財団法人社会貢献支援財団です。その意義と実践に対して、ここに謹んで感謝と敬意を示します。

代表理事　小山　訓久

▲山菜採り体験

▲山中湖旅行

▲夏の流しそうめん

▲国連ハビタット授賞式後

▲住まいを得た子どもからのお礼の手紙

特定非営利活動法人日本ホスピタル・クラウン協会

理事長
大棟　耕介

東京都

クラウンとは、日本では「ピエロ」という名称だが、ヨーロッパ伝統芸能の役名のひとつで、正式には「クラウン」という。2003年、理事長の大棟耕介さんがクラウンのスキル向上のため渡米した際に、アメリカのクラウン仲間に誘われて病院などでの“ショー形式”ではなく病室を訪問したことがきっかけとなり、帰国後、ホスピタル・クラウンを始めた。活動を広げるために2005年11月にホスピタル・クラウン協会を設立し、2006年５月に特定非営利活動法人を取得。ホスピタル・クラウンは、定期的に小児病棟を訪問し個々の病室へ入り療養中の子ども一人ひとりと丁寧に関わり、ナーバスになりがちな子どもの心を笑いで癒している。

「笑う」ことは、治療に立ち向かう気力を取り戻したり、周囲の家族や病院のスタッフにも働きかけることで病棟の雰囲気が明るくなる効果もあり全体の関係が潤滑になることも期待されている。当協会では、クラウンの認定制度を導入しており、病院という特殊な環境に対応できる優れた人材を育成するために慎重に人選している。毎年、一定レベルの技術と継続の意志を確認し、認定更新を行っている。2018年９月現在、全国の94病院を106名のクラウンが定期的に訪問している。その他、被災地の避難所等を訪問するなどの活動も行っている。

（推薦者：あい診療所）

この度は、素晴らしい賞を頂きまして誠にありがとうございます。

授賞式では社会貢献支援財団の方々や各地で活躍されている多くの皆様の活動を知ることができる貴重な機会となりました。この場を借りて御礼申し上げます。

私たちは、2005年に愛知県名古屋市の名古屋第一赤十字病院から活動を開始しました。当初は、わずか５名のクラウンからのスタートでした。その後、多くの仲間が加わり、2019年には北海道から沖縄まで150名のクラウンたちが全国94の定期訪問病院での活動を日々続けています。

特別なイベントなどではなく、月に１回、２回と決められた日に定期訪問を行うことで子どもたちからの信頼を得て、慎重に時間を掛けて距離を縮めています。クラウンの訪問は子どもたちとの約束ですので私たちの都合で休むことはありません。近隣で活動するクラウンが行けなくなる場合は、他の地域から新幹線や飛行機を使ってでも病院へ行きます。それは私たちの想像以上に子どもたちはクラウンの訪問を待っているからです。このように15年間、コツコツと活動を続けてきたことで、多くの子どもたちと出会うことが出来ました。

ある病院で「入院したらクラウンに会えるからまた入院したい」。他には、風船をもらって「今日、病院にいて良かったね」と言っていた子どもがいました。子どもにとって毎日の辛い闘病生活が楽しい思い出になった瞬間だったのかもしれません。子どもたちだけではなく家族も辛い入院生活と闘っています。大人たちが一瞬笑うことで子どもたちも笑顔になり病室全体が楽しい雰囲気になります。

私たちの活動は病院の小児病棟内という限られた空間での活動ですので、多くの方の目に触れることの少ない活動です。しかし全国には、辛い病気と闘っている子どもたちが多くいます。私たちは医療従事者ではありません。病気を治すことは出来ません。子どもたちが子どもらしく笑顔でいられる、そして家族が笑顔でいられる、そんな環境作りのお手伝いがクラウンの役目だと思っています。子どもたちが元気になって退院して外で再会することが何より嬉しいです。

これからも子どもたち明るい未来のために頑張ります。

理事長　大棟　耕介

▲クラウンと子どもの楽しい時間

▲クラウンと病院の職員の皆さん

▲入院中の子どもたちからのプレゼント

▲2019クラウン大集合

▲クラウンKと女の子